

白山の自然誌 29

白山の雪形



2009年3月

石川県白山自然保護センター

は じ め に

雪形は山の残雪模様を、動物や人物、物などに見立てて、農作業の開始や豊凶の目安などとして雪国に伝承されてきたものです。しかし、農作業の機械化など農業技術の進歩とともに、農事暦としての実用性はなくなり、雪形は雪国で生活する人々の日常からも遠ざかってしまいました。有名なものは観光資源としても利用されて人気は高いようですが、限られたものしかありません。利用価値の無くなった雪形は人々の記憶から消えさろうとしています。しかし、その消えつつある雪形を、自然と文化の遺産として継承していくことが望まれます。

石川県内にも雪形が存在していることは、一般の人にはつい最近までよく知られていませんでした。それが、近年の調査で雪形が石川県内に、特に白山に残されていることが分かりました。本誌では、この明らかとなった白山の雪形について紹介するとともに、その雪形の伝承がどうなっていたのかをお話します。また雪形の楽しみ方について紹介していきたいと思います。

表紙・裏表紙 白山の雪形

猿たばこ（右）・牛に乗った袈裟かけの坊さん（左）

写真（SN）、イラスト（F）

も く じ

雪形とは	2
雪形とは	
全国にある雪形	
白山の雪形	6
白山の雪形	
猿たばこ	
牛に乗った袈裟かけの坊さん	
田植え男	
苗男	
水竜・火竜	
カラス・コウモリ・ツバメ	
いぶり形	
雪形の認知度と世代間の伝承	15
アンケート調査 1	
アンケート調査 2	
アンケートからみた世代間の伝承	
雪形を楽しむ	18
雪形の価値	
雪形の新たな伝承を	
雪形を作ってみよう	
おわりに	21

ゆき がた

雪形とは

雪形とは

雪形は、平地から仰ぎ見る春先の山の残雪模様を、動物や人物、物に例えて表したものです。その姿・形から農作業の開始の目安として利用されたり、あるいは豊凶の占いなどとして利用されたりするなど実用的な価値が見出されていました。田植えの開始時期や、豆や稗・粟などの種をまく時期、田植え前に水田をならす代かき作業の目安などとして利用されていたのです。長野県白馬岳の山稜には代かき馬という、田の代かき作業に利用されていた農耕馬の姿が、雪の融けた地肌に黒く映えます。長期の天気予報もなかった時代に雪形がその代わりとして利用されていたのです。まさに雪国に生きる人々の生活の知恵であったのです。

雪形の名称がそのまま山名として使われているものもあります。長野県北アルプスの蝶ヶ岳（蝶の雪形）や爺ヶ岳（種まき爺さんの雪形）のほか、全国にある駒ヶ岳には駒（馬）の雪形があることからこの山名がついたものがあります。富山県北アルプスの僧ヶ岳は僧の姿の雪形から、五箇山の人形山は人形雪と呼ばれる手をつないだ人の形の雪形からこの名前がつけられました。この人形雪には次のような言い伝えがあります。昔、年老いて重い病を患った母を持つ2人の姉妹が、白山権現様のお告げによって母を助けられたお礼に、



代かき馬 (YN)
長野県白馬岳



人形雪 (YN)
富山県人形山

女人禁制の人形山に登りその帰りに遭難し、雪形になったとされるものです。このように雪形には、雪形にまつわる伝承が残されているものもあります。

歴史的にも古く江戸時代の紀行文には雪形が紹介されるなど、古くから知られ利用されていたわけです。

最近では雪形に観光的な価値を見出し、雪形にちなんだ町おこしや商品の開発がされている場合もあります。長野県の大町市では雪形まつり

が行われたり、福島県では地元の吾妻小富士に見られる雪うさぎ（種まきうさぎ）にちなんだ雪形の形をしたお菓子やパンの製造が行われたりしました。

しかし、多くの雪形は、その本来的な利用価値であった農作業の目安や豊凶を占うものとしての利用が、農業技術の進歩、天気予報の発達によって利用されることも無くなり、また機械化などによって共同での農作業もなくなったためにその伝承が途絶えようとしています。

なお、雪形は残雪部分（白色）を指す場合と雪が融けた跡の地肌部分（黒色）を指す場合の2通りあり、残雪の場合はポジ型、地肌部分の場合はネガ型として区別しています。



雪うさぎ（種まきうさぎ）（YN）
福島県吾妻小富士

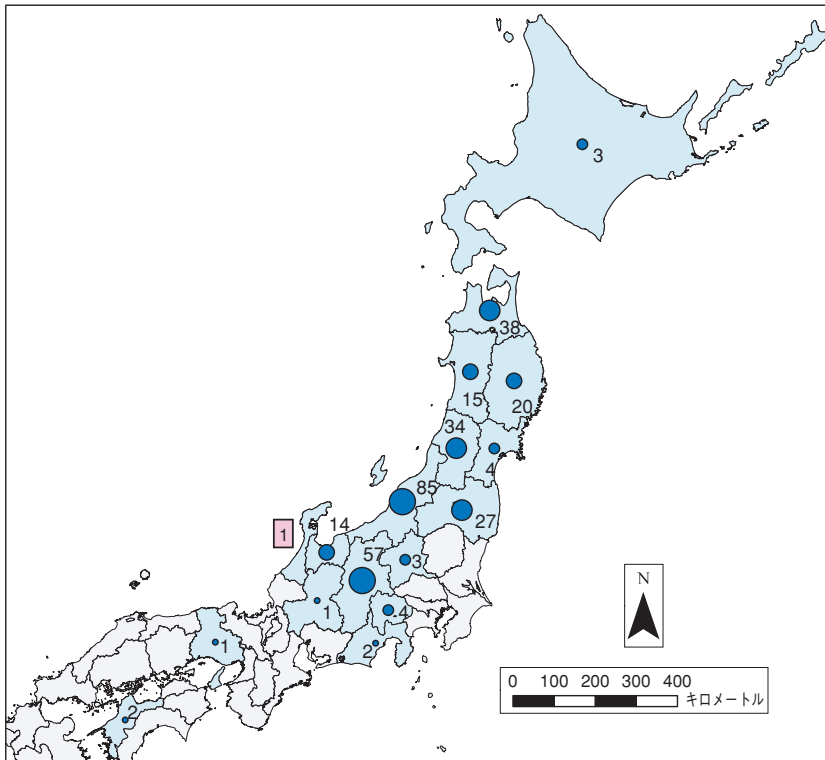
全国にある雪形

雪国を中心に全国に残る雪形を初めて集大成した方が田淵行男さんです。その著書の『山の紋章 雪形』（1981年、学習研究社）では写真やイラストなどをつかって雪形を紹介しています。その数は全部で311個に上ります。

県別で見ると一番多いのは新潟県の85個、ついで長野県の57個、以下青森県38個、福島県27個と続き、中部や東北といった雪国の県に多いことがわかります。新潟県の雪形についてはその後の調査で、173個あることがわかりました（『図説 雪形』1997年、高志書院発行）。最北は北海道で田淵行男さんの紹介では、3つの雪形があるとされていましたが、最近になって道内での雪形が掘り起こされ、最北は利尻島の利尻山にも雪形があることが分かっています。

南は兵庫県の氷ノ山^{ひょうのせん}に1個、愛媛県の石鎚山^{いしづち}に2個の雪形があると田淵さんは紹介しています。そして石川県にある雪形は「不明 白山にあるとのみ聞いている」として1個しか記されていません。

『山の紋章 雪形』の中で紹介されている313個の雪形をもとに、何が雪形に例えられているのか調べてみました。一番多いのは動物で全体の半数近くの140個あり、次に多いのは人物の77個、以下道具が45個、文字が22個、植物が11個と続きます。動物の中でも多いのは、馬・駒の37個と牛の18個でいずれも二桁に達します。これらの名称には「代かき馬、農牛」とされているものがあるなど農耕用に使用されていたために、雪形の名称にも多く使われていると考



全国にある雪形
田淵行男著『山の紋章 雪形』より作成。

雪形の素材

分類	数	雪形の名称に使用されている語
動物	140	馬・駒(37)、牛(18)、兎(9)、犬(7)、鯛(7)、鳥(6)、鯉(5)、鷺(5)、鶴(5) など
人物	75	爺(22)、入道・僧(16)、男(7)、婆(6)、鬼(3)、人形(3) など
道具	45	扇(5)、馬鍬(5)、鍬(4)、舟(4) など
文字	22	八(5)、一(2)、山(2) など
植物	10	アワ、イチヨウ、ウツギ、クルミ、ダイコン、苗、ナス、フクベ、マツ、マツタケ
その他	19	三角ちまき、武田菱、セツ星、農岩、蛇の目、三日月、雪三つ など

田淵行男著『山の紋章 雪形』より作成。雪形の名称に使用されている語の()内の数はその語を含む雪形名称の数。馬と駒、入道と僧はひとくくりとした。動物や道具の一部分を示している雪形もその動物や道具として分類した。

えられます。動物の中には獅子や竜といった想像上の動物も含まれています。人物で多かったのは爺です。これは、実際は「種まき爺」となっているものがほとんどであり、それ以外の人物についても「種まき入道」、「粟まき婆」といったように農業と関係した言葉がつくものが多く、道具にも鍬などの農具があり、植物は栽培植物の名称がみられるなど、雪形と農業との関係の強さが理解できます。

このように雪形の名称には特徴がありますが、その形や大きさは同じ名前であっても、まったく違って見えます。雪形について田淵行男さんは次のように述べられています。「大きく明快で、美しいものもあれば、小さく、不鮮明で分かりにくいものもある。数日で消えていく短命なものから、月余を生きる長命なものもある。」(『山の紋章 雪形』より)。雪形といっても千差万別で、数もたくさんあるのです。国際雪形研究会を主催し、雪形の普及啓発に尽力されている(独)防災科学技術研究所の納口恭明さんによれば全国の雪形の数には1,000を下らないとのことであり、まだまだ眠っている雪形が多く存在しています。

また、雪形という言葉は外国に同じ意味の用語はありません。残雪模様に対し意味を持たせる日本人独特の自然観によるものなのかも知れません。津波が「TSUNAMI」として国際用語として認められたように雪形も「YUKIGATA」として認められるようになるかもしれません。

白山の雪形

白山の雪形

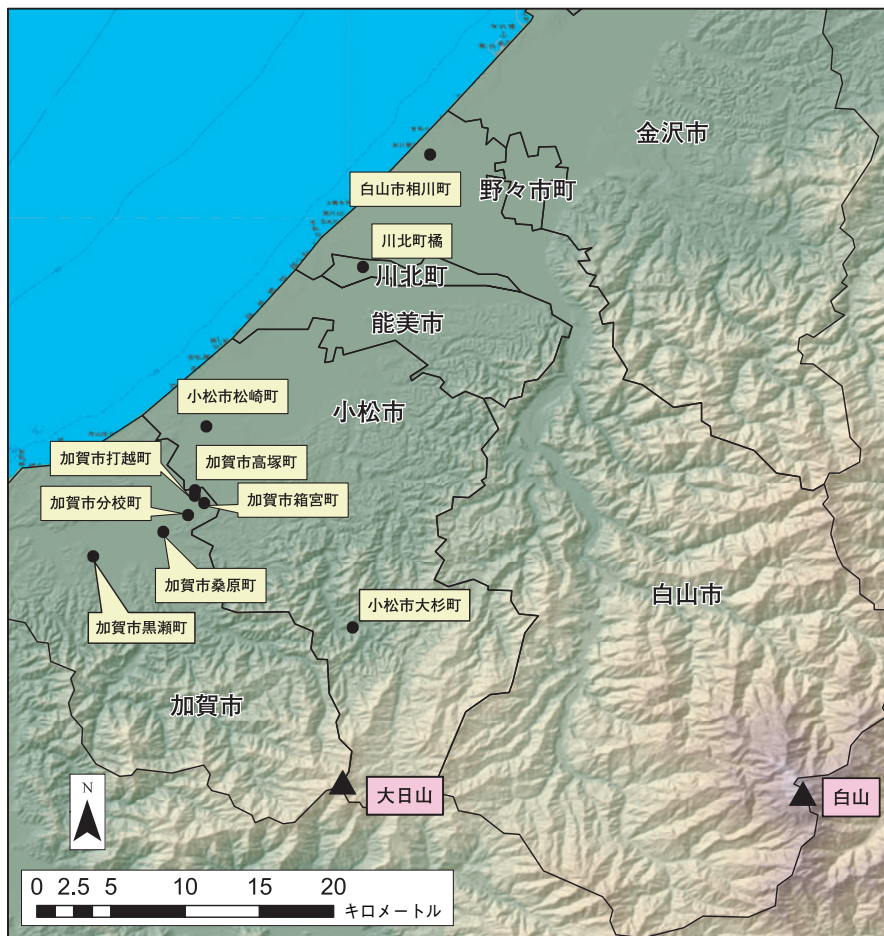
先の『山の紋章・雪形』の中で、石川県の雪形については不明のものが1個存在するとだけしか記されていませんでした。しかし、最近の調査の結果、石川県内にも多くの雪形があることが分かってきました。現在までのところ、10個の雪形が石川県内にあります。場所は白山の山稜部に9個、もう1個は加賀市・小松市との境界に位置する大日山にありました。内訳はポジ型が4個、ネガ型が6個です。雪形の伝承地はその対象となる山系が見渡せる場所でないといふ発生しないので、伝承地は必然的に平野部にあります。加賀市・小松市の平野

白山の雪形

No.	名称	形	場所	タイプ	伝承地	利用（農事暦など）	出現のピーク
1	猿たばこ (たばこを吸っていたおじいさん)	横向き猿と葉たばこ	白山山陵 (四塚山西側斜面)	ポジ	加賀市打越町、箱宮町、高塚町、分校町、桑原町	畦塗りの目安	5月上旬
2	牛に乗った袈裟かけの坊さん (大ガラス)	牛とその牛に乗った袈裟かけの僧	白山山陵 (加賀禪定道西側斜面)	ネガ	加賀市黒瀬町ほか	雪が融け、大ガラスが見えてくると農作業を始める	4月下旬
3	田植え男 (五月男)	笠をかぶった人の上半身	白山山陵 (清浄ヶ原)	ネガ	川北町橋	田植えの目安	5月上中旬
4	苗男	苗を入れた籠を両端に下げた天秤棒を担ぐ人の姿	白山山陵 (清浄ヶ原)	ネガ	川北町橋	田植えの目安	5月上中旬
5	水竜	竜のような形	白山山陵 (四塚山北東斜面)	ポジ	白山市相川町	水不足を予測	4月下旬～6月
6	火竜		白山山陵 (清浄ヶ原)				
7	カラス	カラスの上半身	白山山陵 (加賀禪定道西側斜面)	ネガ	小松市松崎町	野菜の苗を定植する目安。3つの雪形が出た後に苗を定植すると霜にやられない。	5月上旬
8	コウモリ	コウモリの翼	白山山陵				
9	ツバメ	ツバメ	白山山陵 (目附谷上流部)				
10	いぶり形	いぶりの形	大日山	ポジ	小松市大杉町	田植えの目安	5月下旬

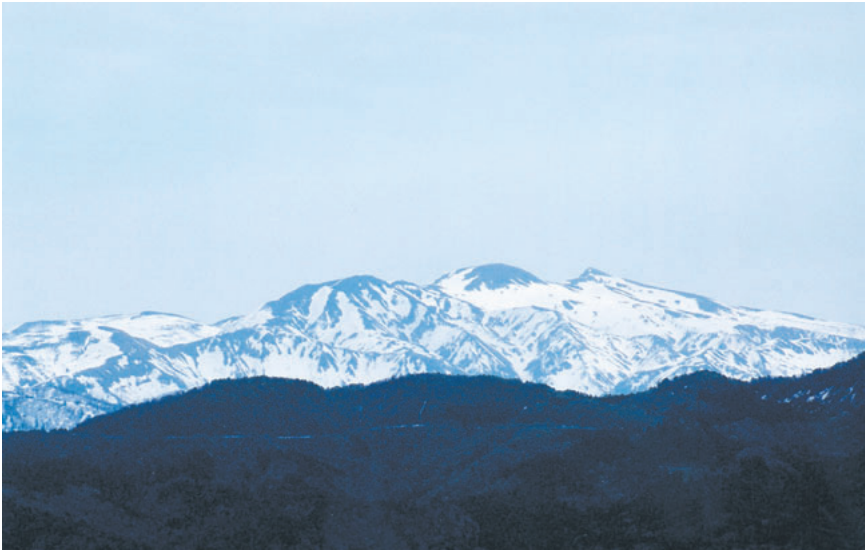
ポジは残雪部分、ネガは雪が融けたあとの地肌の部分。出現のピークは農事暦などで利用する場合の時期を示す。

部の集落と手取川扇状地の川北町と白山市の集落です。残りの1集落は小松市の山間部にありました。それぞれの特徴を次に紹介します。



雪形の伝承地

●：雪形伝承地。▲：雪形のある山系。国土地理院作成数値地図200000「金沢」及び数値地図50mメッシュ(標高)日本2をもとに作成。

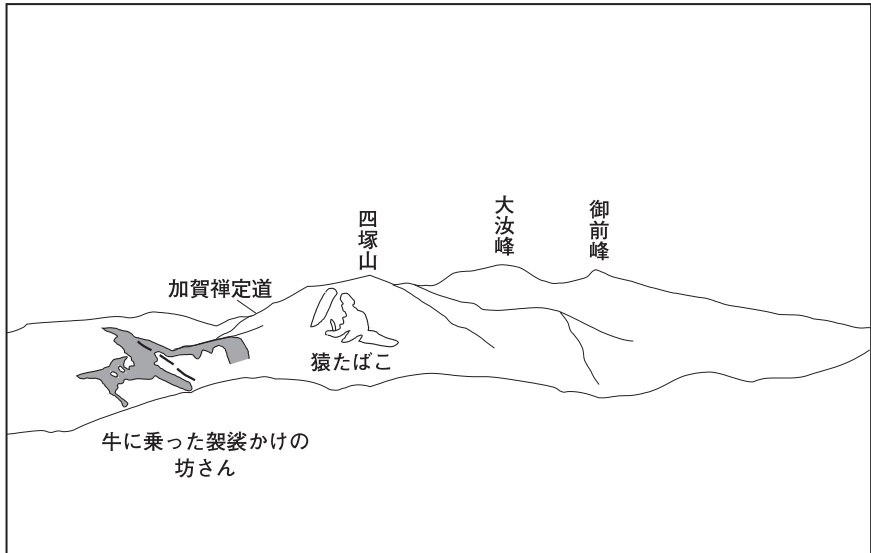


猿たばこ、牛に乗った袈裟かけの坊さん
2005年5月2日撮影。撮影場所：小松市那谷町。

(SN)

猿たばこ

形はたばこの葉と横向きに座っている猿の姿です。雪形のある具体的な場所は白山の四塚山西北西斜面です。ポジ型の雪形です。伝承地は加賀市の打越町、分校町ぶんぎょうほか加賀市内でかなりの広がりをもちます。出現は5月の上旬で畦塗りの目安として利用されていました。畦塗りは田植え前に、水田にはる水を外に逃がさないようにする作業です。現在の田植えは5月上旬がピークですが、昔の田植えは現在よりも遅かったのです。この雪形については別な名称で呼ばれていることが後に分かりました。「たばこを吸っていたおじいさん」です。この伝承は、加賀市桑原町で伝えられていたもので先の分校町などと比較的近い位置にあります。この雪形の場合は、葉たばこはそのまま、猿はおじいさんとなり、猿と葉たばこの間の小さな残雪を「キセル」と位置づけます。雪形が現れると暑くも寒くもない時期となり霜が降りなくなるので、穀物（大豆など）を干す目印としていたそうです。



猿たばこ、牛に乗った袈裟かけの坊さん

輪郭線の詳細は推定。「猿たばこ」が「たばこを吸っていたおじいさん」になった場合は間の小さな残雪部分がキセルと位置づけられる。

牛に乗った袈裟かけの坊さん

牛の顔と胴体そしてその上に乗る袈裟（僧衣の上に左肩から右脇下にかけてまとう長方形の布）をかけた僧の上半身が見られます。牛と正装した僧の組合せは文化的・宗教的な背景をうかがわせます。場所は加賀禪定道の天池付近から西側斜面にいたるところです。黒いネガ型のものです。加賀市在住の伝承者によると、バスガイドの教本にこの雪形が記されていたそうで、この雪形の場合は農事暦のような利用との関係は分かっていませんでした。しかしその後、この雪形についても別の雪形の呼び名があることが分かりました。加賀市黒瀬町の古老が「大ガラス」と呼んでいたとのこと。雪解けが進み黒い部分が増えていくと、お坊さんの頭部分がカラスの頭、牛の頭と胴体が翼となって、翼を広げた「大ガラス」に見えてくるのです。「大ガラス」が出てくると農作業を始める目安にしたそうで、この雪形についてもやはり農事暦との関係がありました。

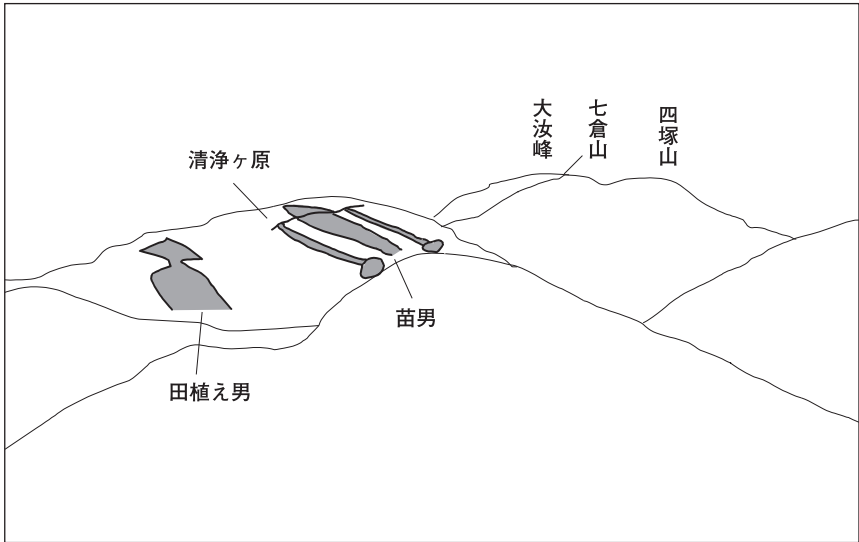


田植え男、苗男

2007年5月27日撮影。撮影場所：白山市上野町。

田植え男

姿は笠をかぶった人の上半身の形をしています。場所は白山の岩間道の見返り坂付近を頂点とした西側斜面（清浄ヶ原）にかけてのところです。ネガ型で、伝承地は手取川扇状地にある川北町橋です。出現時期は5月の上中旬で、手植えをしていた頃の田植えの目安として利用されていました。当地の田植えも昔は遅く、5月の中旬でした。別名「五月男」とも言います。これが見えれば絶好の田植え日和であったそうです。伝承者によると田植えの作業の時に「がんばれや、田植え男も見てるでや」と声をかけてもらっていたとのことでした。伝承は数軒の農家が田植え・稲刈り時に双方が互いに力を貸し合う労働慣行の「結（ユイもしくはイイ）」グループ内で伝承されていました。しかし、田植えの機械化とともに「結」をする必要がなくなり、伝承は次の世代につながらなくなってしまいました。橋集落には次に紹介する苗男の伝承もありますが、田植え男の伝承者は苗男についてはまったく知らなかったそうです。



田植え男、苗男
輪郭線の詳細は推定。

苗男

苗を入れた籠を両端に下げた天秤棒てんびんぼうを担ぐ人の姿をしています。昔は、苗を苗代から運んだり、田んぼの中に配ったりする時に、苗を入れた籠を天秤棒で吊り下げて運びました。水気や泥を含んだ苗は重く、運ぶのは男の仕事でした。苗男はその姿を現しています。場所は田植え男の南側（写真では右側）の岩間道の西側の清浄ヶ原付近です。田植え男同様ネガ型の雪形で、出現のピークも5月上中旬と同じで、並んだ姿を見ることができます。伝承地も同じ川北町橋で、この雪形についても田植えの目安として利用されていました。しかし、伝承者は別人で子供の頃父親から聞いたとのことでした。同世代の親戚や稲刈りを手伝ってもらった人もこの苗男を知っていたようですが、知っていた人は集落内で限定されていたようで、この伝承者も田植え男の存在を知りませんでした。2つの雪形は並んで存在しており、しかもその目安も同じであるのに互いに知らなかったということになります。

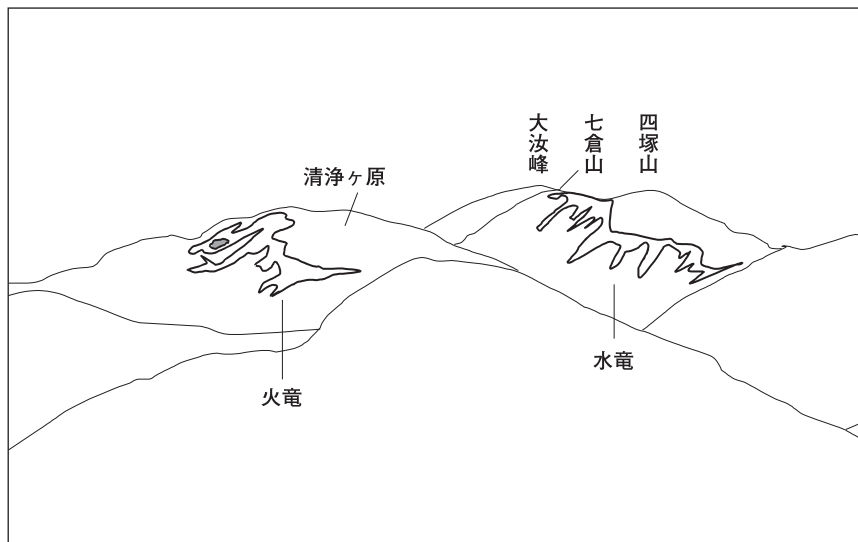


水竜、火竜

2007年6月16日撮影。撮影場所：白山市上野町（10頁の写真と同じ撮影場所）。

水竜・火竜

竜のような形をした雪形です。水竜は七倉山から四塚山を経て油池付近まで続く加賀禅定道の北東斜面付近に、火竜は清浄ヶ原付近の苗男と田植え男に挟まれた辺りです。いずれもボジ型の雪形です。4月の下旬から見えはじめ、田植え男、苗男の形がくずれた後も形が残り6月頃まで続きます。伝承は白山市相川^{そうご}の在住者によって受け継がれていました。この雪形は竜の形で水不足を占いました。水不足になるかどうかは、米作りにとって重要な情報であり、特に手取川扇状地の末端の相川では大切なことでした。竜の形を見て水が多いか少ないかを考え、田植え後の水田にまく肥料の量や種類を変えました。他の人よりも多くの米を作るために他人に話をしなかったそうです。伝承者はこの雪形を祖父から伝え聞き、「平安時代から続く雪形占い」と言われたそうです。手取川ダムが完成して灌漑用水が安定し、また耕地整理が進んで水田1枚1枚が大きくなった後は、肥料の与え方も変わったので、雪形占いも不要となりました。



水竜、火竜
輪郭線の詳細は推定。

カラス・コウモリ・ツバメ

カラスの上半身、コウモリの翼、ツバメのような形をしたネガ型の3つの雪形です。カラスは加賀禪定道の尾根から東側部分、ツバメは釈迦新道尾根の七倉山分岐から白山釈迦岳に下る途中の北西斜面のあたりですが、形はよくは分かっていません。コウモリについてもカラスとツバメの間にあるとされますが場所も特定されていません。カラス、ツバメが先に見え、遅れてコウモリが見えてくるということです。伝承地は小松市の松崎町で伝承者はお一人だけです。5月の上旬に出現し、野菜の苗を定植する目安とされていました。この3つの雪形が出れば霜が降りなくなるので、苗を安心して定植したということです。この頃は八十八夜で遅霜が発生する時期とされていますが、それにやられないようにするためであったようです。残念ながら伝承者以外に知っている人はいないとのことでした。伝承者は戦後父親から知らされ、1965年頃までこの雪形を使って農業を行っていましたが、はっきりとした形まで教えてもらってはいませんでした。農業をやめてからは他の人に話すこともなかったそうです。



カラス、ツバメ

2006年5月4日撮影。撮影場所：小松市松崎町。この範囲にコウモリもあるが位置が特定されていない。

いぶり形

いぶりは、田植えの直前に田を平らにする農具で、アルファベットのTの形をしています。この形をした雪形がいぶり形です。場所は白山とは別の小松市と加賀市の境界に位置する大日山にあります。ポジ型の雪形で、伝承地は小松市の大杉町で、山あいから大日山が見通せません。伝承者は現在、分校小学校校下の高塚町に住んでいます。後述する加賀市分校小学校で行ったアンケートの中で明らかとなりました。大日山の山腹にTの形をしたいぶり形が、当時の当地の田植え時期である5月の下旬頃に、見えて来るとのことでした。子供の頃、農作業をしている時に親から聞いたとこのことで、この雪形についてもさきのカラス・コウモリ・ツバメと同様に伝承者の方はお一人だけでした。



いぶり形（推定）

伝承者の聞き取りからいぶり型の位置を示す。2008年5月6日撮影。撮影場所：小松市大杉町。

雪形の認知度と世代間の伝承

白山を中心とした石川県内に残る雪形を紹介して来ました。そのほとんどが限られた人々の記憶にとどめられていたにすぎないものでした。そこで雪形が現在、どれほど認知されているのか、次の世代へ伝えられているのか、その正確な実態を把握するために雪形伝承地においてアンケート調査を行いました。調査は雪形伝承が残る集落のある加賀市立分校小学校と川北町立橋小学校で行いました。

アンケート調査 1

加賀市立分校小学校の通学区域は加賀市打越町、高塚町、箱宮町、分校町の4農村集落で先に紹介した猿たばこの伝承が伝えられている地域です。調査は2004年6月に実施しました。全校児童145名の皆さんにアンケート調査を配布し、家庭で「猿たばこを知っている人はいるか」、「知っている人は、いつごろ・だれから聞いたか」などについて児童が調査をしてくるというものです。

その結果、有効回答数が105件あり、内訳は祖父母・曾祖父母世代（58歳以上）の回答が43件、父母世代は62件でした。このうち猿たばこを聞いたことがあると答えた回答は15件で有効回答数の14.3%でした。

さらに15件を世代・居住集落・性別・いつごろ誰から聞いたかについてまとめました。世代は15件中13件が祖父母・曾祖父母世代で、祖父母・曾祖父母世代で知っている人の割合が高いことが分かりました。居住集落は、打越町が5件と一番多く、残りの3集落で3件ずつ、1件は福井（地元出身で現在は福井に在住）となっており、分校小学校の通学区域のいずれの集落でも猿たばこは知られていました。いつごろ誰からの問いに対しては子供の頃という回答が多く、聞いた人は親・祖父といった近親者からが多いという結果が得られました。回答者の年齢から推定すると、猿たばこを知った時期は戦時中あるいは戦後まもない頃までさかのぼれ、その回答者の上の世代が雪形を知っていたことから、少なくとも戦前から当地域では猿たばこが知られていたと考えられました。

また、このアンケートからは猿たばこ以外の雪形の情報が寄せられました。それは「いぶり形」と呼ばれるもので、これについては前節で述べました。

アンケート調査 2

川北町立橋小学校は、田植え男、苗男の伝承が残されている橋集落があります。調査は2007年7月に実施し、小学校5・6年生51名を対象にアンケート調査を配布し、家庭で「田植え男・苗男を知っている人はいないか」、「知っている人は、いつごろ・だれから聞いたか」などについて調査をしました。対象集落は橋集落以外にも橋小学校の通学区域である川北町朝日・木呂場・木呂場新・下田子島・橋・橋新・なでしこ・舟場島の7集落で行いました。その結果、有効回答数は56件で内訳は祖父母・曾祖父母世代（60歳以上）が21件、父母世代は35件でした。この中で田植え男、苗男を聞いたことがあると答えた回答数は6件で有効回答数の11%でした。

しかも回答者はすべて橋集落の居住者からのものでした。橋小学校の5・6年生の4割は橋集落の居住者であることもあり、もともと他集落からの回答は少ないのですが、この田植え男と苗男については、橋集落でのみ伝承されている可能性が高いと考えられました。知っている世代は6件中5件が祖父母・曾祖父母世代であり、いつごろ誰からとの問

雪形を知っている人

分校小学校

世代	No.	集落名	年齢	性別	いつごろだれから
祖父母・曾祖父母世代	1	打越町	84	女性	打越に来て町内の人から
	2	打越町	69	女性	子供の頃、親から
	3	打越町	64	男性	子供の頃
	4	打越町	58	女性	子供の頃、母親から
	5	高塚町	73	男性	20歳の頃
	6	高塚町	72	男性	60年前
	7	高塚町	69	女性	じいちゃんから
	8	分校町	71	男性	?
	9	分校町	68	女性	?
	10	分校町	63	男性	中学校の先生から
	11	箱宮町	74	女性	職場の人から
	12	箱宮町	74	女性	10年前、知り合いの人から
	13	福井	58	女性	子供の頃、親から
父母世代	14	打越町	40	女性	義父母から
	15	箱宮町	35	男性	子供の頃、母親から

橋小学校

世代	No.	集落名	年齢	性別	いつごろだれから
祖父母・曾祖父母世代	1	橋	87	男性	父親から（明治生まれ）
	2	橋	66	男性	4年生の頃、父親から
	3	橋	65	男性	小学校低学年の頃、祖母から
	4	橋	64	男性	15歳の頃、おじいさんから
	5	橋	60	女性	昭和27年頃、実家の曾祖母
父母世代	6	橋	36	女性	小4の時、学校の先生から

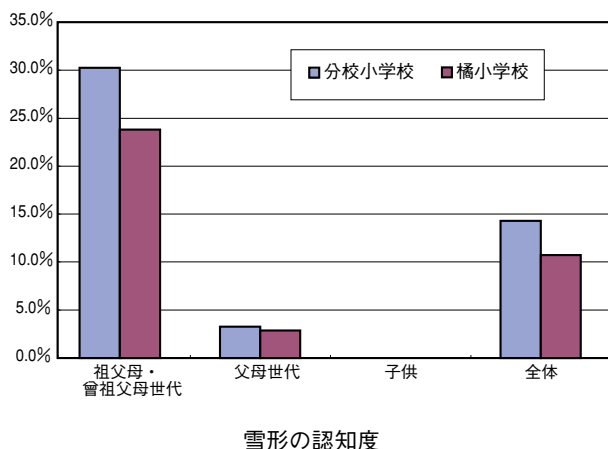
分校小学校の場合は猿たばこを知っておりどれかを特定できた人、橋小学校の場合は苗男、田植え男を知っている人。いつごろ誰からの欄は原文をそのまま引用した。

いに対しては小学生の頃など子供の時が多く、聞いたのは父親や祖母など近親者からが多くなりました。この田植え男、苗男についても回答者の年齢といつごろ誰から聞いたかのアンケート結果から推察すると、戦前から集落内で知られていたと考えられました。

アンケートからみた世代間の伝承

2つの学校でのアンケートの結果から祖父母・曾祖父母世代、父母世代、子供の各世代別の、雪形（分校小学校の場合は猿たばこ、橘小学校の場合は田植え男、苗男）の認知度を知らするために雪形を知っていた人の世代別割合を整理しました。

その結果、祖父母・曾祖父母世代においては分校小学校で30.2%、橘小学校で23.8%、父母世代ではそれぞれ3.2%、2.9%、子供世代は両小学校とも0%でした。子供世代はアンケート前の各学校での事前調査から認知度は0としました。各世代の認知度は、上の世代ほど認知度が高く、一番下の子供世代では雪形を知っている者はいないという結果が得られました。



アンケート調査で雪形（分校小学校の場合は猿たばこ、橘小学校の場合は田植え男、苗男）を知っていた人の世代別割合を示す。子供世代はアンケート前の各学校での調査から認知度は0とした。

すなわち、新しい世代への伝承はこれらの地域においても途絶えようとしており、今回のアンケート調査がなければ途絶えてしまったかもしれません。

農業技術の進歩により実用性がなくなり、時代の流れとともに雪形は役割を果たし終えたとも言えますが、これはとても寂しいことです。

雪形を楽しむ

雪形の価値

雪形の伝承が消え去ろうとしていたのは、その雪形に伝承していく価値が無くなった、すなわち農作業や豊凶を占う目安としての必要性が無くなってしまったことがあげられます。しかし、農作業や豊凶を占う目安になっていたということは、先人達の長い年月の経験を通して見いだしたものであり、それは貴重な自然と文化の遺産であるといえるのではないのでしょうか。

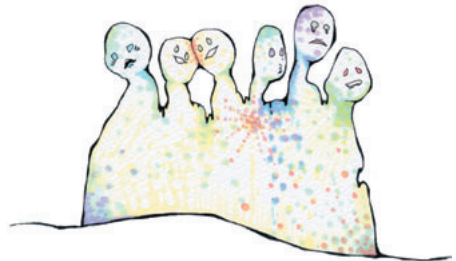
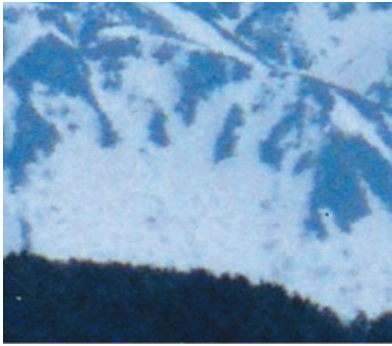
また、雪形のように毎年同じ頃に出現するものを長期にモニタリングすれば地球温暖化などの気候の変動を知る手がかりとして利用することも可能です。伝承者によれば、雪形の出現の時期が昔に比べ早くなってきているとのこと。このように雪形は雪国の自然と文化の遺産として、また積雪量などの変化を知る科学的な素材として利用し、継承していくことも可能です。

雪形の新たな伝承を

風致景観として雪形を楽しむこともいいのではないのでしょうか。先にも述べましたが、雪形に相当する外国の言葉はありません。山や雪を愛でる日本人独特の自然観にもつながるのが雪形です。郷土や国土を愛する気持ちを育てる上でも、時代時代にあった雪形を作り出してみようというのもいいのではないのでしょうか。現代の人々の感覚で新たな雪形を見つけようということです。

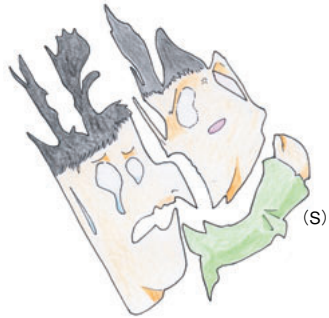
昨年（2008年）、石川県白山市にあります金城大学短期大学部美術学科の学生さんに白山麓の生活文化について話をする機会がありました。その時に白山の雪形について紹介し、最後にみなさんにオリジナルの雪形を作ってもらいました。美術学科の学生さんだけであって短時間でしたが独創的な雪形を編み出してくれました。その時作成していただいたものの中から2つの作品を紹介します。

さて、皆さん自身の手でもオリジナルの雪形を作ってみませんか。名前も忘れずに付けて下さい。面白い雪形ができれば白山自然保護センターまで連絡して下さい。



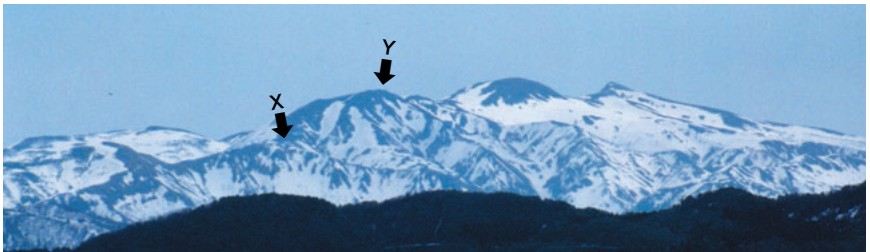
(O)

群衆(下図X)



(S)

ケンカする顔(下図Y)



(SN)

猿たばこと牛に乗った袈裟かけの坊さんの横に新たな雪形誕生!?

雪形を作ってみよう

下の写真の中から、あなた自身でオリジナルの雪形を作ってみてください。



白山山頂部

(SN)

雪型の名称とイラスト

コピーを白山自然保護センターへお送り下さい。

おわりに

石川県内で明らかとなった10個の雪形について紹介しました。2つの小学校で実施したアンケートの調査結果から雪形の世代間の伝承実態についても紹介しました。そこで分かったことは、雪形は限られた人々の記憶として留められていたにすぎず、世代交代に伴って人知れず忘れさられていく運命にあったということです。農事暦に利用されるなど、先人が長い年月の経験を通して出来上がった雪形は、雪国の貴重な自然と文化の遺産です。この雪形が今後も伝承されていくことを望み、本誌がそのために役立つことができれば幸いです。春先になって白山を見た時「あそこに猿タバコが見える」、「田植え男が現れた」と多くの人々に語られるようになると嬉しいです。また、現代人の感覚で新たな雪形を作り、雪形を楽しむことも大切だと思います。新たな雪形をつくってみてください。

伝承され眠っている雪形はまだあるかもしれません。雪形についての情報があれば、白山自然保護センターまでご連絡下さい。

本誌を作成するにあたり、納口恭明さん、神田健三さん、和泉薫さんのご厚意により皆様の調査結果を使用させていただきました。3氏をはじめ、雪形の伝承者の皆様、アンケート調査に協力いただいた加賀市立分校小学校、川北町立橋小学校の皆様、イラストを作成していただいた藤川恭子さん、大坂唯さん、酒匂悠希さんに感謝申し上げます。

写真提供 納口恭明 (YN)・中川澄夫 (SN)

イラスト作成 藤川恭子 (F)・大坂唯 (O)・酒匂悠希 (S)

白山の自然誌 29
白山の雪形

発行 平成21年3月31日
文・構成 小川 弘司
発行 石川県白山自然保護センター
〒920-2326 石川県白山市木滑ヌ4
Tel.076-255-5321 Fax.076-255-5323
<http://www.pref.ishikawa.jp/hakusan/index.htm>
E-mail:hakusan@pref.ishikawa.lg.jp
印刷 (株)中川印刷



環境にやさしい植物性大豆インキを使用しています

